

## 自由業パパの敗北宣言

黒須 和清

「自由業なんですか？　じゃ奥さんもお子さんもい  
いですね。家事は手伝ってもらえるし、いつでも遊  
んでもらえるし…」どうしてみなさんそう思うんで  
しょうか。わたしは家でブラブラしてるわけじゃな  
い。ちゃんと仕事をしてるんです。世間のパパたち  
と同じぐらい、いや、ポーンナスなんかないですか  
それ以上に働かないと世間並みの暮らしができない  
わけですよ。男は仕事です。家事と育児はママがや

るんです！　と、こう言うと「まあ！　黒須さんた  
ら何て封建的？　男も家事をして当たり前世に何  
て合わないことおっしゃるの？」と糾弾されてしま  
うかもしれませんが、違うんです。よく見てくださ  
い。わたしはこれを威張って言ってる…ホラ、こ  
んな寂しそうな顔で言っているんですよ…。

わたしの父は家事も育児もまったく言っていない  
ほどやらない人でした。決して家庭を顧みないわけ

ではなく家族は大事にしておりましたが、母がいな  
いと何もできない。御飯も食べられない。パンツの  
ありかもわからないという有様、そのため、結婚後  
何と一〇年もの間、母は実家へ里帰りできませんで  
した。その一〇年ぶりの里帰りすら一泊で帰らせた  
ほどの亭主関白、育児にしても教育にしてもほとん  
どのことは母がきめていて：尊敬すべきところの多  
い父もその点だけは情けない、こういうふうにはな  
らないぞと「反面教師」にして育ったこのわたし：  
台所パパ、育児パパはわたしの理想でした。

「ぼくは自由業で家にいる。二人はいつも一緒だ  
よ。君はなんて幸せ者なんだい。家事も育児も君だ  
けにやらせやしないよ、家の事はフィフティフィフ  
ティ！」と、思っていた結婚当初。もともと料理は  
好きですし、子供の教育にも興味がある、そうじも  
洗濯も嫌じゃないし…。その後女房がマタニティ  
ライフに入ったときも「今こそ我が輩の価値を見  
よ！」と張り切って家事やりました。「これこそ自

由業パパの特典！ わたしは普通のパパとは違いま  
すよ！」そしていよいよ我が子の誕生：やれオムツ  
替えだ！ お風呂いれるぞ！ 哺乳びん洗うよ！

とにかく初めてのことばかり、新しくペットを飼っ  
たようなものですから何もかも興味深々、「やっぱ  
男も子育てしなくちゃだめだね」何でもやってみて  
は人に自慢するわたしでした。そして少しの優越感  
「サラリーマンのパパはかわいそうにな、こんなに  
一日ベッタリと子育て体験できないもんな、自由業  
でよかったな：」。

育児にフィフティフィフティを望む理由は子ども  
にふれあう権利を対等に得たいから、そして本音は  
「パパとママどっちが好き？」の質問に「パパ！」  
と答えてほしいというママへのライバル意識：だっ  
てどうしても不利なことが一つ、それは「パパには  
オッパイがない！」。わたし結婚後の安穩生活で一  
〇キロ太りましたから、典型Aカップの女房と同じ  
ぐらい出っ張ってはいますが中身が無い。正直これ

はうらやましかったです。だってどこにいたって身ひとつで我が子に糧をあたえることができる。適材適所理論でいくなら…：こはんタイムのふれあいの特権はママのもの…：これは大きいぞ！　だって「だっこ」はママでもできるけど「オッパイ」はパパでは代われない…：いくら自由業で家にいたってどうにもならない…：そうなんです。ママは最初から「切り札」持っているんです。負けるもんか！　これに對抗するには…：そう！「男は力！」

子どもは一種の「荷物」です。「女より男の方が体力がある」というのが世の常、わたし自称『色男』ですから筋肉モリモリの力自慢ではないけれど、それでも体重三〇ンキロヤセ型の典型的な女房よりは確実に力持ち、適材適所理論でいくなら我が子の運搬は当然わたしが専従、おでかけの時の「だっこの特権」は当然わたしのもの…：ふれあいのチャンス多し！「パパとママのどっちが好き？」選には確実に有利！　パパは持病の腰痛も何のその、おでか

けのときはがんばりましたよ。パパに一票をとるために。

ああそれでも…：犬でも小鳥でも子どもでも、やっぱりエサくれる人になつくんですよ。

「育児は競争じゃないわよ」とママは言うでしょ



う。でも「パパとママとどっちが好き？」とたずねるとやっぱり「ママ！ だってミルクくれるもの」これは悔しい。だからこちらも負けずに切り札「男は力」ところがこの切り札もだんだん使えなくなってくるのがある日気付きます。

子どもが大きくなってくると近所の公園のお砂場が社交場。砂場にできる子どもの輪。そしてその周りにできる親の輪、何でこの輪はみんなママ？ 考えてみれば当たり前。平日の真っ昼間、普通のパパは皆会社、パパの居ぬ間の女だけの社交場、たとえ自由業の名札つけていたって働きの三〇男はやっぱりその輪の中には加われない。かといって女房と一緒にやって輪の傍らで笑っているのもなきけなし。だから「遊びに連れていく権利」はいつしかママに移りました。きっと子どもはこう思うわけです。「ママはいつも遊びにつれていってくれる…ママ大好き！」はい、ママ一票。

それならば「叱られたあとのなだめ役」これがパ

パ？「ママはこわい、でもパパはやさしい」この図式で票かせぎ！ でもね…うちのママは甘いんです。いや、別に批判はしません。これはママの「一見投げやり子育て術」の作戦で一理ありますからね。食べ物の好き嫌いほうるさく言わない：「わたしもそうだったけどたいした病気もせず今でも元氣！」というのがその裏付け。お行儀もそれ程うるさく言わない：おやつが遅かったりして夕食が食べられない我が子に「出されたごはんは残さず全部食べる！」とつけられたわたしはいついついうるさく

言ってしまうですが「食は義務ではない。体調が優先。楽しく食べるが基本。残したきゃ残せ」というのがママ、「そのかわりあとでおなかすいたって知らん、食べなかつた奴が悪い！」という結論。あとでおなかすいてつらい思いをするのがかわいそうだからむりやりでも食べさせようとすることのパパの「先見の愛」を、子どもはそこまでよんでくれません。「残しても許してくれるママの方が優しい」「マ

「マ好き！」となって、はい、ママ一票！ 本当はパパのほうが優しいのに…。

よし「ママが優しい」ならね、「パパは厳しい」路線で尊敬の念でもあおごうじゃないか！ あせってきたパパはもう育児じゃなくただの人気取り。でもこれはいつでも逆効果なんです。特にインパクトのある顔でなければ「女より男の方が迫力がある」のが当然、同じぐらい怒ってもパパの方が断然怖い。脅かすなら断然有利、でも怖がらせてどうする？「家庭運営」には必ずいざれ仲良くしなきゃいけないという条件がありますから、適材適所理論で言えば、「叱るのはママの方がいい」早く和解して家庭の空気を平和に持つていくことが何よりも大事ですからね。だから叱るのはママにまかせておくほうが無難…じゃパパは？…

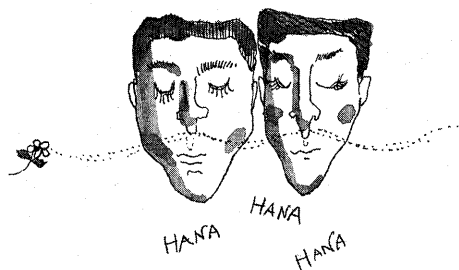
ようやくわかってきました。ママは「育児」にとっても有利な存在にできているんです。育児ってママだけでもできちゃうものなんですよ。ママがいれば

いいんです。ママがいればパパが「サラリーマン」だろうが「自由業」だろうが関係ないですよ。わたしたちは結局の所「パパはお仕事、ママ育児」これ何の不自由もなく暮らしている「郷」にいます。「郷」に入るなら「郷」に従え。しっかり家の運営のできる世間様並みのママがちゃんとしているならわざわざ「特殊」になる必要もないんじゃないかな…。パパはそう思ってきました。

「司令塔が二つあると兵隊たちはとまどう」のが道理、ましてやそのひとつが「仕事」というもののおかげで時々しかかわれないとしたらその意思統一たるや面倒臭いことこのうえない。意見主義主張をぶつけあつていくことも大事です。でもそれにエネルギーを費やして運営が停滞してしまつてはマイナス、それなら片方が司令官、片方はオブザーバー…司令官はどっち？ やはり育児専従のママ、その方が「適材適所」に違いない。ひとつの荷物を二人一緒に運ぶと二人同時に息が切れてそこでストップ、

でもわかるがわる連べば常に進める…、それも一つの連携のかたちかな…。パパはある日そう思いました。

とどめは幼稚園の「父親参観日」。期待してました。うちの子はどんな日常を園で過ごしているのだ



ろう。お歌は元気に歌っているかな？ お遊戯の腕前は？ 幼稚園のカリキュラムって自分が通っていた頃とはずいぶん変わったのかな？ 「いつもの園生活」をみせてくれるのかと思っていたら何と『運動会』でした。「おとうさんと一緒に遊びましょう！」だって。翌年は『工作大会』でした。「なつかしいワリバシ鉄砲や風車をお父さんに作ってもらいましょう！」だって。ただの父子のつどいの日、パパは「親」じゃなくて「特別ゲスト」。終わったあとの懇談会、先生から「おたくの〇〇ちゃんはいつもこんなで…」とか「もつとおうちでこんなふうにしてみてください」とかママに秘密のパパだけへの情報やご指導くださるのかと思えばなんのことはない。「みなさまお仕事お忙しい中ありがとうございます」だって。そしてパパたちの感想会「こんなふうに触れ合いの機会を作ってくださいってとっても嬉しい！」ってみなさん感謝してましたっけ。

「パパ」ってそうだったんですね。いや、そうなん

ちまったのかもしれない。「家からでて外でお仕事する人」なんです。だからママと子ども達が営んでいる日常の「お客さま」、ママ無いときの「非常用家事育児要員」にすぎない。これは共通のパパの役目：「自由業ならいいですね。家事も育児も力を合わせてできるから：」そんなことないんです。同じなんですよ。同じならまだ会社という遠方に身を置いておけるあなたがたの方が幸せですよ。家事にも育児にも手を出し口を出したいのをこらえながら我が家で仕事をする苦勞：。遊びがって仕事部屋に入ってくる我が子追い出して、その寂しそうな後ろ姿を何度も見るうしろめたさと自己嫌悪：。

結婚九年目、「家事も育児もファイファイファイ」とうたっていた自由業パパはついに敗北宣言！ 世間の波にのまれてしまいました。女房が働いていたらまた違ったのか、まわりじゅうが「自由業」ならまた違ったのか、勿論世間体など気にせず にわたし自身にもっと己を通す強さがあればこんな

なさけないグチにはならずにすんだはずなんです。うが、とにかくわたし、今、非常時以外家事も育児もほとんどしていません。しつてもホント甘いです。いいんです。どうせパパの育児は「オプショナル」なんだから。ママの留守にファーストフードで昼飯食おうがおやつたたくさん食べようがゲームセンターで散財しようが：。一日ぐらいそんなことしたって大丈夫、だって栄養だって金銭感覚だって普段はママがしっかりしつけているからね。そうママへの信頼感あるからこそそれができるわけ、パパはひたすら仕事、そして子どもたちと解放区のオプショナルタイムを楽しむ、それでいいんですよ。え？ ヤケになってる？ まあね。それでも、唯一

風呂だけはわたしの係りにさせてもらっています。これは育児への未練。このわがままのお陰でママは子どもを寝付かせ自分も寝たあともう一度起きて風呂に入るといふ「二度寝」を続けているんです。ママが入れる方が家庭運営上では無駄がないのはわ

かっています。でもこれぐらいないと、わたしはただの働きバチ。起きてから寝るまで一度も子ども達と触れ合いなくてどうして我慢できてるんだい世のパパ達よ。とわたしは叫びたい！ ああ…ババっていうのは悲しいものだな。

「別に困ってるわけじゃなし、必要なときはたのむし…：そんなときあなたはちゃんとやってくれるからうち夫婦うまく連携してると思うよ。とにかくあなたは余計なこと考えず仕事してれば」と言ってくるママはきつと育児上手家事上手の「世界一の女房」に違いないでしょう。そんな多忙の中でも好きなエレクトーンひいたり「炊飯器のカバー」なんていう別になくなって困らないものを面倒臭いキルティングでこしらえたりしている余裕もあるんだから。昔はパパの役目だった「魚の臓物取り」もいつのまにかできるようになってるし、今パパにおよびがかかるのはゴキブリが出たときだけ、「ああ自由業パパでよかった。だっていつゴキブリがでてきて

もすぐ退治できるもん！」これがわたしの存在価値？ 近頃ではパートも始め、「仕事」の領分まで進出してきたママ、それに比べてこのわたし、今では物価もわからないし、洗濯の仕方でも忘れちゃった。もしまた子連れのチョンガー暮らしをさせられたらきつと三日と持たないだろうな…あ、これはわたしの父と同じだぞ。そうか…：もしかすると父にもきつと同じ葛藤があつて、努力があつて、悟つて…：そして敗北したのかもしれない…。男三十八歳にしてようやく父の域に達したというわけか…。我が子が大きくなって『幼児の教育』から執筆依頼をうけたとき、きつとこう書くでしょう。「わたしの父は自由業にもかかわらず家事もまったく言っていないほどやらない人でした。…と…。

(クリエーター)